

年間第 20 主日
マタイ 15 : 21～28

2014.8.17 9 : 30 ミサ
柴田 潔(イエズス会司祭)

カナンの女

今朗読された福音は、癒しのわざの一つですが、最初、イエス様はカナンの女性に冷たい態度を取るのです。わたしたちにはそれがどうしてなのかなかなか理解できません。カナン地方は、ユダヤ人ではない異邦人(ギリシア人などが考えられる)が住ですむところだったので、「ユダヤ人にしか遣わされていない」とイエス様が断ってしまったのかもしれませんが。「小犬」という言葉もありますが、ユダヤ人から見た異邦人で、イエス様には珍しく差別的な発言にも受け取れるので、わたしたちは困ってしまいます。

どうしてイエス様はすぐにカナンの娘をすぐに癒さなかったのでしょうか？聖書学者の意見は、大まかに言って二つです。一つ目の説は、この箇所を書いたマタイの教会の状態を表している、というものです。マタイの教会は、元々ユダヤ人だけで自分の教会を運営していましたが、カナンの女に象徴される異邦人の人々がたくさん来るようになって、仕方なしに受け入れた。この癒し物語は教会が変わっていく転換点だという理解です。

二つ目は大胆な説で、イエス自身の意識の転換点だったとするものです。イエス様は片田舎のガリヤラで活動していて、初めはユダヤ人の救いだけを念頭に置いていました。けれども、カナンの女の必死の願いで心動かされます。この説に立つと、メシアの意識が変わった、神様の憐れみが注がれる範囲が広がる転換点として理解できます。初めはユダヤ人を重点的に宣教していたイエス様でしたが、カナンの女性の必死さにほだされて心変わりをした、とする説です。今日の福音は、マタイの教会にしても、イエスの意識にしても、心変わりがテーマです。

心が変わる心の幅が広がる、このようなことが身の回りにないか思い巡らしていると、「花子とアン」の先週のストーリーが思い浮かびました。先週は、あゆむくんが疫癘で急死してしまいました。NHKのドラマの中では、宗教色が出ていませんが、花子さんはクリスチャンの家族です。9月7日まで銀座の教文館で「村岡花子と教文館」という特別展が開かれています(3階ギャラリー ステラで入場無料: 平日 10～20 時、休日 13～20 時)なので、関心のある方はどうぞ。その、あゆむ君の死について、彼女は『アンのゆりかご』の中でこう書いています。

絶望の底でふと心の耳に聞こえてきた言葉がありました。「神は独り子を与えるほど世を愛された」。幼い頃から、数え切れないほど読んだり聞いたりしてきた言葉が、最愛の道雄（テレビの中ではあゆむ）が帰らぬ人となった今、初めて現実味を持ってわたしの胸に迫ってきました。神は愛する独り子を世に送るほど人類を愛された。独り子を与えて惜しまない「愛」とはなんだろう？ 中略（ここで『王子と乞食』を読みます）。読み終えたとき、啓示にも似た閃きが走りました。わたしたちは何者にも代え難く愛していた子供を失いました。それはわたしの今日までの生活の間に味わった最大の悲痛でした。しかも、わたしは子を失ってはじめて子を愛する道を悟りました。自分の愛がいかに浅かなものであったということをも自覚したのです。子を愛するつもりでも、野心のような満足を求めていた時もあったことを悟りました。我が子をこの目で見ることができないうちで愛する今、愛は醇化していきます。そうして、その醇化された愛は有意義な生活を営むように私を励まします。7歳で世を去った道雄（あゆむ）は、わたしの内なる母性に火を点じてくれた神のみ使いでした。一度火がついたら消えません。自慢の息子を持たない悲しみの母ですが、一度燃やされた貴い母性の火を、悲しみの涙で消し去ろうとは決して思いません。あかりを高くかかげて世の子どもたちのために、道を照らすことがわたしの願いです。

美しいものは命が短い。でも、短いからこそ不滅の印象と感激を残すのです。その印象と感激は悲しみの母に絶え間なく靈感を与えます。神が定めた運命に従います。自分の子は失ったけれど日本中の子供たちのために上質の家庭小説を翻訳しよう。息子は私を励ましてくれます。

『アンのゆりかご』（わたしが口語体に加筆変更しました。)

花子さんは最愛の息子の死を通して、もっと広く、日本の子どもたちを愛するようになりました。花子さんの心が広がりました。話を癒し物語に戻すと、カナンの女性に出会ったイエス様は、パンを増やす奇跡をもう一度行われます。最初はユダヤ人のため。2回目は異邦人のため。神様の恵みを異邦人にも与えたい、イエス様の心が広がりました。イエス様の心が変わり、2回目の奇跡をなされました。私たちはどうでしょうか？ イエス様のように、また花子さんのように、心を広げて、新しく神様の愛を伝えていきましょう。